

『古代アメリカ』14, 2011, pp.89-100

<調査研究速報>

ペルー北部地域、インガタンボ遺跡第三次発掘調査

山本睦

(日本学術振興会特別研究員)

ホセ・ルイス・ペーニャ・マルティネス

(南フロリダ大学大学院)

1. はじめに

インガタンボ遺跡は、エクアドル共和国との国境に近い、ペルー共和国北部、カハマルカ県ハエン郡ボマワカ地区に位置する神殿遺跡である(写真1; 図1)。

現在の形成期研究では、当該時期の社会展開に際して、海岸部と山地、あるいは熱帯低地間の地域間交流の重要性が指摘される。この中で、インガタンボ遺跡が存在するワンカバンバ川流域は、その地勢もあり、ペルー北部地域やペルーとエクアドルの国境地帯における海岸部と山地や熱帯低地、または山地間の地域間交流の重要地であると考えられている。そのため、筆者らは、ワンカバンバ川流域の形成期における社会動態、とくに周辺地域との地域間交流と社会変化の関係を、地域社会固有の歴史的コンテクストに即して明らかにすることを主目的として、これまでに遺跡踏査とインガタンボ遺跡の発掘調査を実施してきた[山本 2007; Yamamoto 2007, 2010]。この結果、現在までに、インガタンボ遺跡を中心として、ワンカバンバ川流域の編年が確立され、流域社会の考古学的諸状況が次第に明らかになりつつある。

本稿は、2011年8月上旬から9月上旬までの約1ヵ月に実施したインガタンボ遺跡の第三次発掘調査の報告である^(註1)。以下、本文では、インガタンボ遺跡の概要と調査背景について述べた後で、調査成果の概要を記述していく。

2. インガタンボ遺跡の概要と調査背景

ワンカバンバ川流域における考古学的研究は、極めて少ない。インガタンボ遺跡の存在が、初め

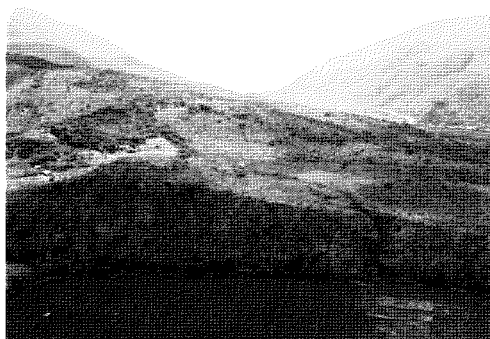


写真1 インガタンボ遺跡遠景

て言及されたのは、ラビーネスによるヘルー遺跡分布地図である [Ravines 1983]。ただし、この遺跡分布地図では、インガタンボ遺跡は、あくまでインカ期の遺跡として登録されている。なお、インガタンボ遺跡におけるインカ期の活動は、その後、ワンカパンバ川流域で実施されたカバック・ニャンのプロジェクトによって再確認され、遺跡を通るインカ道の存在が明らかとなっている [INC 2006]。

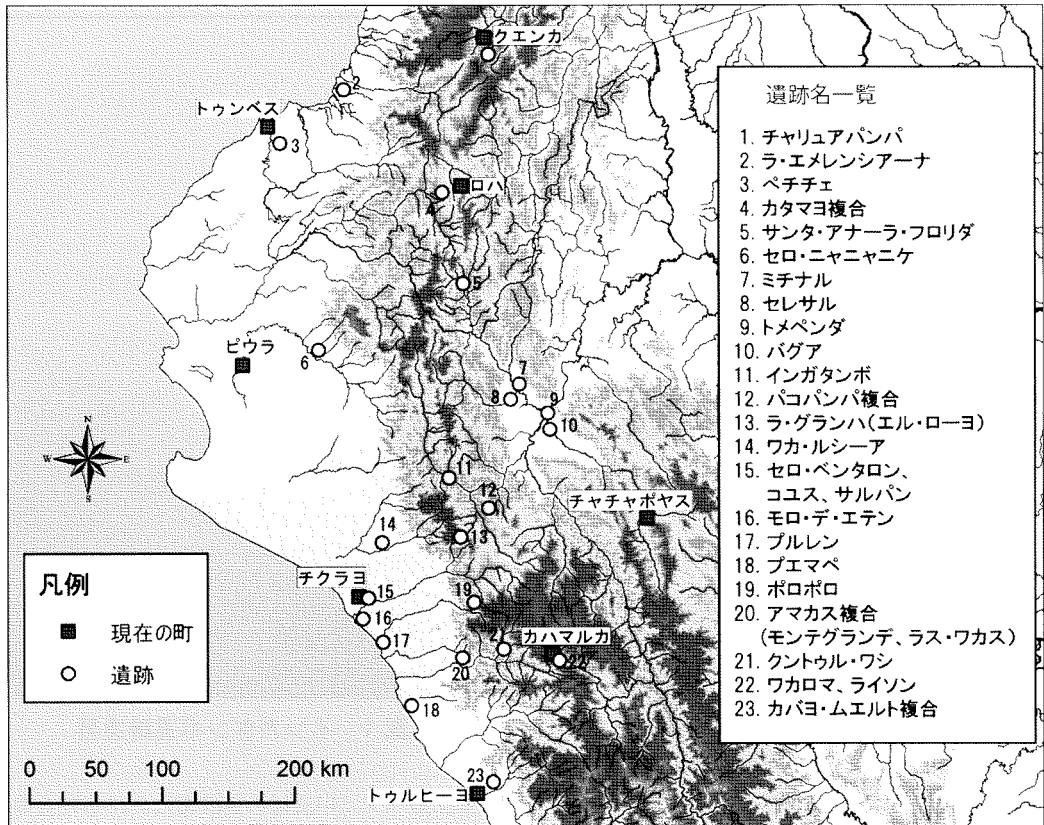


図1 インガタンボ遺跡と周辺地域の主な形成期遺跡

その一方、インガタンボ遺跡における形成期の活動について言及したのは、マラベルによる調査のみである [Malaver 2001]。この中で、マラベルは、ボマワカ地区の教諭が長年にわたって地元で収集し、現在ではボマワカ市の博物館に収蔵されている考古資料の図面を作成した。これらの土器は、その様式から形成期に属することが明白であり、こうして、インガタンボ遺跡における形成期の活動の存在が示されることとなったのである。しかし、上記の博物館収蔵資料は、考古学調査によって収集されたものではない。また、先行研究はいずれも発掘調査を伴うものではないため、出土コンテキストの明確な資料は、筆者らの調査以前には、当該地域に存在しなかった。

ただし、ボマワカ市の博物館所蔵資料や周辺地域（ピウラやハエン、バグア、チョータ）の調査報告に鑑みると、土器の様式的類似や海産性資料の山地や熱帯低地への移動などから、ヘルー北部地域の各地で地域間交流が存在したことが示唆された [Guffroy 1989, 1992; Kaulicke 1975, 1998;

Miasta 1979; Morales 1980, 1998; Olivera 1998; Rosas y Shady 1970; Shady 1974, 1992; Shady y Rosas 1979, 1987; Seki et al. 2010】。

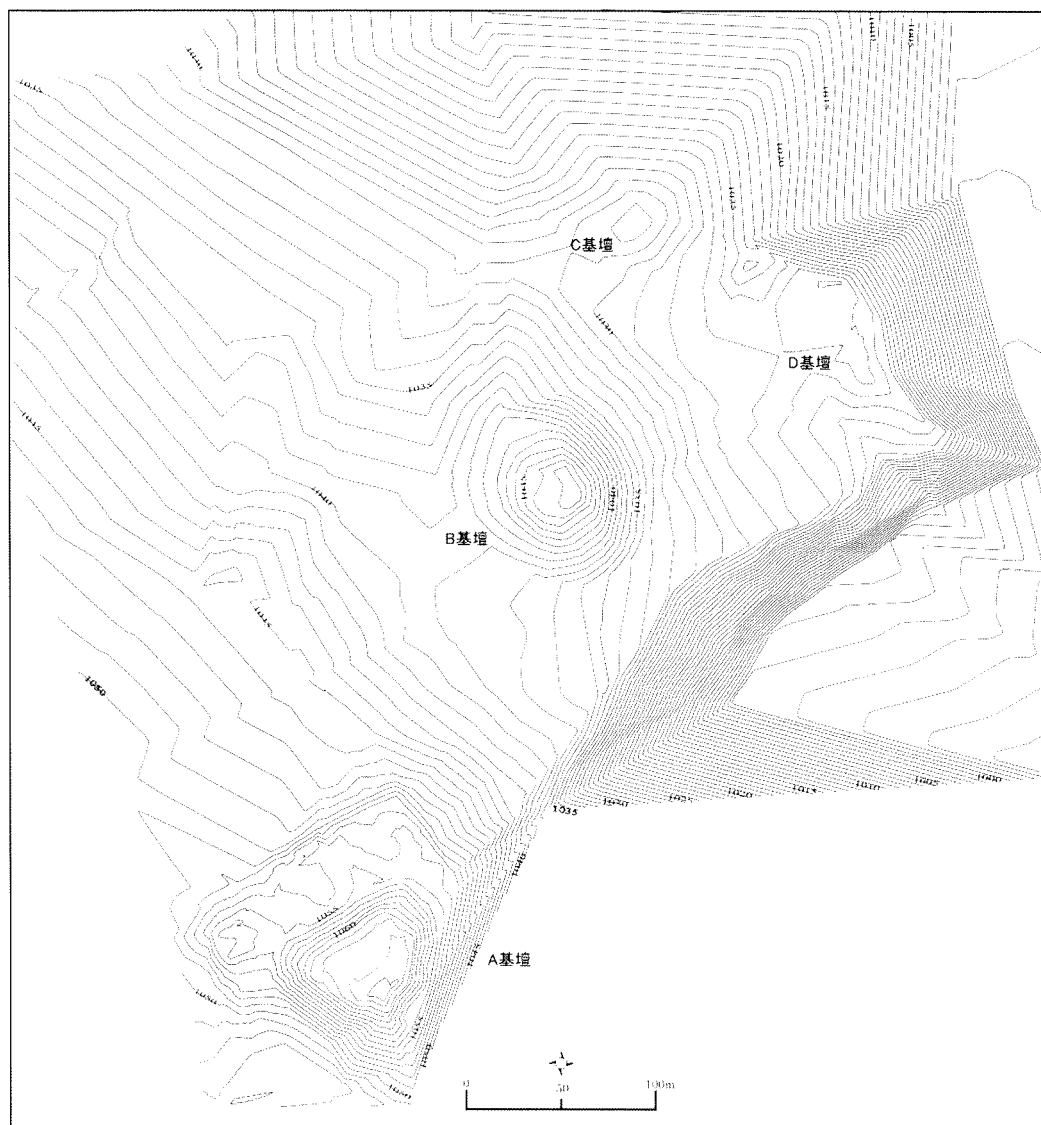


図2 インガタンボ遺跡全体図

そこで、筆者らは、2005年にワンカバンバ川流域を踏査した上で、2006年と2007年にかけてインガタンボ遺跡の発掘調査を実施した(図2)。インガタンボ遺跡を発掘した理由は、流域内で最大級の規模を有していることから、同流域における中心的な神殿であったと考えられたためである。また、博物館収蔵資料と地表面で採集した土器の様式に照らして考えると、インガタンボ遺跡では形成期において形成期中期と形成期後期の少なくとも2時期の利用と、隣接する諸地域との交流の存在が示されたことも選定理由の一つである。

先行研究と遺跡踏査の結果から想定していたことではあるものの、発掘調査によって、インガタンボ遺跡では、形成期からインカ期にわたる計5時期の建設活動の存在が認められた(表1)。そのうちの1時期目から3時期目までに関しては、放射性炭素年代測定によって、形成期に属することが明らかとなっており、最後の5時期目は出土土器からチムー・インカ期に相当するものと想定される。4時期目に関しては、後の時代の攪乱などによってコンテキストの確かなデータが乏しく、詳細な時期決定が困難であるため、現時点では堆積状況や出土土器からチムー・インカ期に属するものと推測している。

なお、既述の1時期目から3時期目、5時期目には、時期名称としてそれぞれ、「ワンカバンバ期」、「ボマワカ期」、「インガタンボ期」、「タンボ期」を冠した。以下、これらの時期名称を用いながら、インガタンボ遺跡の建築の変遷と各時期の特徴について、概略を記す。

インガタンボ遺跡では、ワンカバンバ期に、自然の丘陵を利用して、主要基壇の建設が始まるが、主要基壇以外の場所では、目立った建設活動は行われない^(註2)。また、ワンカバンバ期には、全部で4つのサブ・フェイズが確認されており、各サブ・フェイズにおいて小規模ではあるが周期的な増改築である更新活動が行われた。その結果として次第に基壇の高さが

表1 インガタンボ遺跡の編年

編年	ピウラ	ハエン	バグア	インガタンボ遺跡	バコバンバ	カハマルカ	クントウル・ワシ
1500	後期ホライズン	インカ期		タンボ	インカ		
1000	後期中間期	地方王国期		タンボ			
500	中期ホライズン	ワリ期	ピクスモチエ			カハマルカ	
0	前期中間期	地方発展期	ピクス				
200	末期		チャピーカ	エルサラード		ライオン	ソテラ
550	後期後半		ラ・エンカターダ		エル・ローヨ	EL	コバ
800	後期前半		ハネシージョ	ラ・ベカ			クントウル・
1000	後期中半		ニマニヤニヤ	バグアII	バコバンバII	後期ワカロマ	イドロ
1200	後期前半			バグアI	バコバンバI	前期ワカロマ	セラ・コンゴ
1500	形成期			モレリーヤ	バングアンチエ		ラ・コンガ
2000	草創期	前期					
2500	先土器期	早期		ワンカバンバ			

増し、最終的には基壇上部に黄褐色の泥漆喰で仕上げられた構造物が築かれた。なお、ワンカバンバ期には、現在まで土器の出上例が存在しない。

ボマワカ期に入ると、以前とは異なる建築軸を用いて主要基壇の更新が行われ、その体積は大幅に増加する。また、B 基壇、C 基壇、D 基壇の建設が開始され、インガタンボ遺跡に複数の基壇が同時に存在するようになるが、それらの基壇の配置には規則性はみられない。なお、ボマワカ期においても、計 4 つのサブ・フェイズが確認されており、それぞれのサブ・フェイズにおいて更新活動が行われ、基壇の体積は徐々に増加した。その中で、サブ・フェイズ 3 には、主要基壇に載る低層基壇上に黄褐色の泥漆喰で精巧に仕上げられた部屋状構造物が築かれた。しかし、この部屋状構造物は、続くサブ・フェイズ 4 において、破壊を伴って埋められ、その上に円形構造物が築かれたことが明らかとなっている。

続くインガタンボ期は、インガタンボ遺跡で最も大きな更新活動が行われた時期である。この時期の建造物は、ボマワカ期とは異なる建築軸で築かれており、主要基壇が大規模化すると同時に、その周囲を取り囲むように新たに A 基壇が建設された。また、A 基壇上の西側には小規模な西基壇が、東側には部屋状構造物が築かれた。この部屋状構造物の基礎部分からは、海水生種の貝を加工した装飾品が大量にみつかり、A 基壇、そしてその上に載る構造物の建設に際し、奉納儀礼が行われた可能性が示唆される。

さらに、B 基壇ではそれまでの建築を埋めて、基壇上部に部屋状構造物が築かれた。また、基壇西面に B 基壇と A 基壇の間にある広場状空間へと続く回廊が建設された。こうして、インガタンボ期では、A 基壇と B 基壇が広場を挟んで繋がるような配置がとられるようになる。

なお、インガタンボ期には、2 つのサブ・フェイズが認められる。サブ・フェイズ 2 には、大きな更新活動は存在しないが、主要基壇北東角に部屋状構造物が築かれた。また、同時に A 基壇上部東側で、サブ・フェイズ 1 の部屋状構造物を埋めて、新たに小規模な部屋状構造物群が建設された。そのため、主要基壇北東角の部屋は、これらの部屋状構造物群と関連して建設されたものと考えられる。さらに、主要基壇北東角の部屋状構造物では、周辺地域からの搬入品と推測されるバリエーションに富んだ多量の精製土器が出土している。

最後に、先述したように 4 時期目の活動については、いくつかの建造物の存在以外に、これまで詳しいことは把握されていない。しかし、5 時期目のタンボ期には、A 基壇、とくに主要基壇において、インガタンボ期までの基壇を利用しながら、その上に炉や部屋状構造物などといった複数の建造物が築かれたことが明らかとなっている。また、A 基壇上には、建築軸や石積みの技法などから、形成期のものとは明白に異なる「タンボ」と称される部屋状構造物群が確認される。

3. 発掘調査概要

インガタンボ遺跡では、2006 年の発掘に際して、基本単位としての 2×2m のグリッドが遺跡全体に組み、建築特徴に合わせて発掘区が設定されている。そして、A 基壇は 4 つの区画に細分されており、A 区は A 基壇上の主要基壇、B 区は A 基壇上部東側の部屋状構造物群、C 区は A 基壇上部西側の西基壇、D 区は A 基壇上部南側のタンボに対応している（図 3）。今回、発掘を実施したのは、この内の A 区、B 区、および D 区である。以下、発掘区ごとに、調査成果を記述していく。

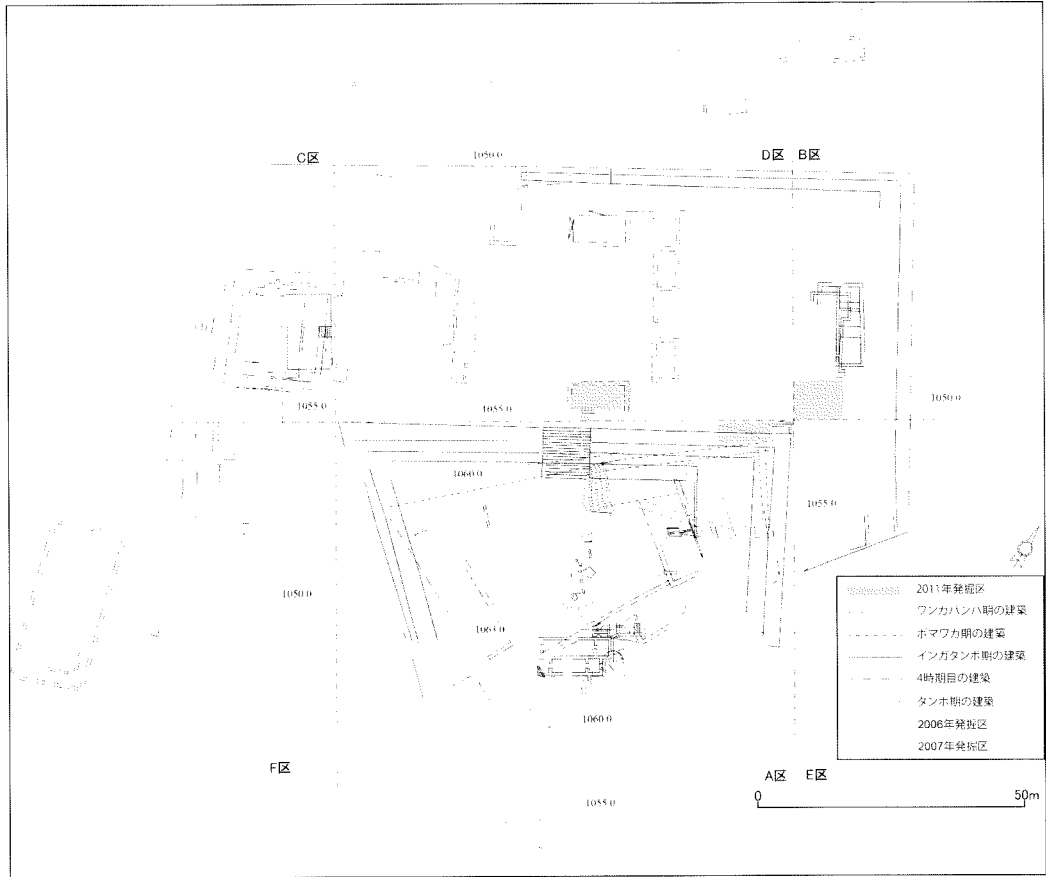


図3 A基壇全体図

3-1. A区の発掘（写真2）

今回の発掘では、先述の主要基壇北東角で検出した東西約4m、南北約2mのインガタンホ期の部屋状構造物の広がりや形態、およびその周囲の堆積状況を明らかにするため、2007年の発掘区の西側に東西10m×南北4mの発掘区を設定し、発掘を実施した。また、前回調査では、部屋状構造物から、搬入品と考えられるパリエーションに富んだ大量の精製土器、および海産性の貝製品が出土した。そのため、本発掘では、同様の資料を獲得することで、地域間交流を論じる際のデータの充実を図ることを目的とした。同時に、部屋状構造物の周囲を発掘することで、上記の資料がどのような状態、かつ過程で埋められたのか、その出土コンテキストを詳細に把握することも大きな目的の一つであった。

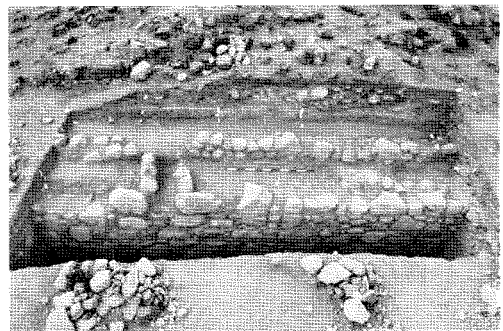


写真2 A区発掘区遠景

発掘の結果、表土および表土付近の層は、発掘区が主要基壇北面の斜面ということもあり、基壇擁壁の壁材の崩落、あるいは植物の根などによって、堆積が著しく攪乱されていることが明らかとなった。また、これらの層からは、チムー・インカ期の土器が出土しているため、部屋状構造物の上部を埋める堆積は、形成期以降に生じた活動の結果であると考えられる。

その一方、地表面から 1m 近く掘り下げていくと、次第に土器が変化して、形成期、とくにインガタンボ期の純粹層となることが確認された。また、前回調査で検出した部屋状構造物の広がりには発掘区北側断面に現れた石壁で確認されたただけであったが（写真 3）、今回の発掘では、壁に対応する床面を明確に検出することができた。さらに、今回の成果としてあげられるのは、前回では確認できなかった床面の張りかえの過程を明確に捉えることができ、新旧二つの床面の間に数十 cm の厚さを持つ灰層を検出したことである。興味深いことに、搬入品と考えられる精製土器（写真 4, 5）、あるいは貝製品（写真 6）、黒曜石（写真 7）はいずれもこの灰層から出土している。ここでいう精製土器とは、ペルー北部山地で顕著なオレンジ地赤彩土器やペルー北部海岸や北部山地でみられる灰色、あるいは黒色磨研土器のことである。これらの土器は、いずれもインガタンボ遺跡ではインガタンボ期に初めて現れる土器である。また、インガタンボ遺跡では出土量が少ない無頸壺や、初めての事例となるジェットミラー（写真 8）も出土した。なお、2006 年と 2007 年の調査を通じて採取された黒曜石はわずかに 2 点のみであったが、今回の発掘では計 5 点の黒曜石が出土している。これらに加えて、既述の灰層からは、石製ペンダントや大量の動物骨も出土していることから、床面の更新に際して、火を用いた儀礼が行われ、それと同時に精製土器や貝製品、あるいは石製品が奉納された可能性が示唆される。

3-2. B 区の発掘（写真 9）

B 区では、2006 年の発掘区の南側、つまりは前回調査で検出されたインガタンボ期の部屋状構造物と、先述の A 区主要基壇北東角で確認された部屋状構造物との間に、東西 10m×南北 8m の発掘区を設けた。この目的は、インガタンボ期における部屋状構造物の範囲とその建設過程を明らかにし、同時期に存在した A 区主要基壇北東角の部屋状構造物との関係を把握するためである。また、2006 年には B 区の部屋状構造物の基礎部分から、海水生種の貝製品が大量に出土したため、同様の資料を獲得することで、神殿更新の過程と地域間交流を論じるためのデータを充実させることも目的の一つであった。

発掘の結果、2006 年と同様に、表土や表土直下の層ではチムー・インカ期の土器が出土することを確認したが、この時期に対応する建造物は検出されていない。

その下層からは形成期の堆積となっており、2006 年に同定した 2 つのサブ・フェイズを含むインガタンボ期の部屋状構造物を検出した。これらの部屋状構造物は、それぞれ前回調査で検出した部屋状構造物に加えて、A 区の主要基壇北東角の部屋状構造物とつながり、全体として巨大な部屋状構造物群を呈する。このことから、インガタンボ期の A 基壇上部東側は、複数の部屋状構造物が存在する区画であったと考えられるが、その機能についての詳細は不明である。

基本的に、インガタンボ期のサブ・フェイズ 1 の建築下は人工的な盛土であり、自然の丘陵を利用しながら A 基壇を建設した際の埋土であるが、今回の調査では、部屋状構造物下に 1 本の石壁が確認された。この壁の方向軸は、インガタンボ期のものと同じであり、ボマワカ期の建築軸とは異

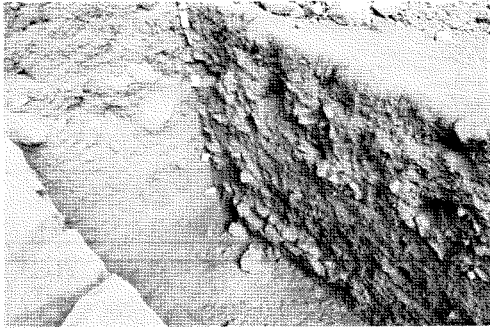


写真3 北側断面の石壁、
および西側断面の床面と灰層



写真6 A区出土貝製品

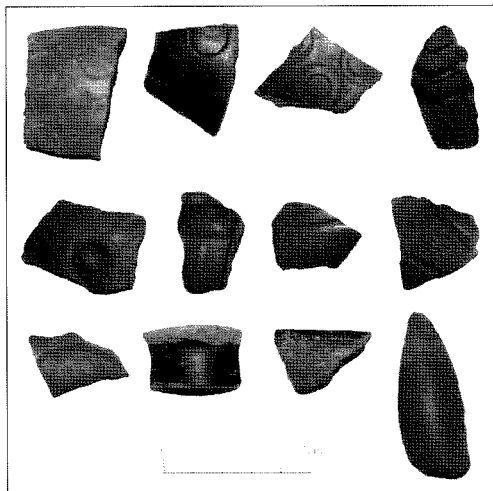


写真4 A区出土土器①

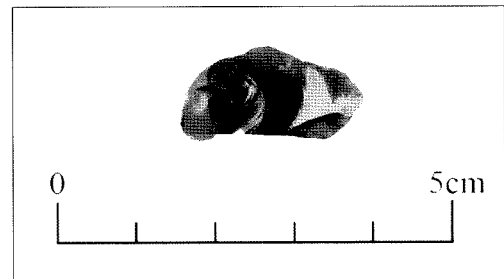


写真7 A区出土黒曜石

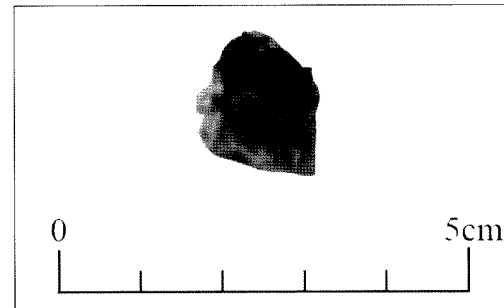


写真8 A区出土ジェットミラー

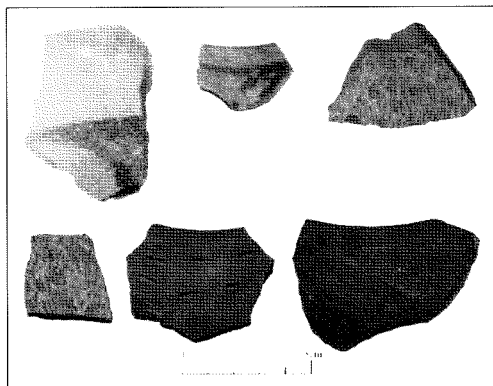


写真5 A区出土土器②

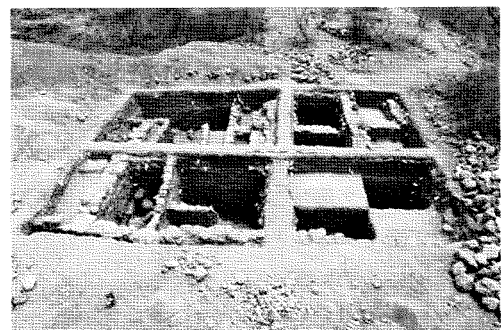


写真9 B区発掘区遠景

なっている。そのため、インガタンボ期には、サブ・フェイズ1の部屋状構造物の建設に先駆けて、部分的に石壁を利用していた時期が存在していたと考えられるが、現状ではデータが乏しい。

また、サブ・フェイズ1の期間内に、部屋状構造物内部の仕切り壁の付加や床面の張りかえが数回行われたことが確認されており、保存状態が良好な箇所では、壁際に黄色の泥漆喰が検出されている（写真10）。さらに、今回の調査においても、部屋状構造物内から海産性と推測される貝製品が出土したが、その出土量は2006年よりも少量である。

続くサブ・フェイズ2では、以前の部屋状構造物を埋めて、その上に新たに部屋状構造物が建設された。部屋状構造物内部には数回にわたって床面を張り直すなどの小規模な改修の痕跡がみられるが、部屋内部の仕切り壁はほとんど見つからない。

なお、先述したようにインガタンボ期の建築下は基本的に人工的な盛土である。ただし、今回の発掘では、部分的にはあるが、地山直上にインガタンボ期以前のものと考えられる活動の痕跡（灰層）が確認された（写真11）。このことは、A基壇の建設以前に、主要基壇の周囲において、自然の丘陵の傾斜面を利用して火を用いた活動が行われたことを示唆するものである。

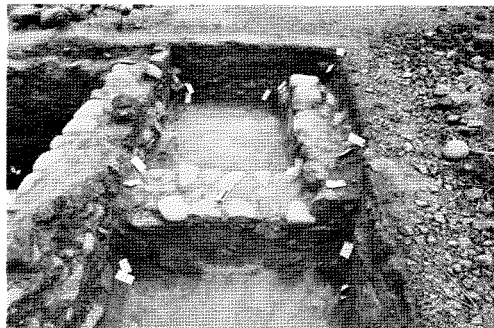


写真10 壁面に残る泥漆喰

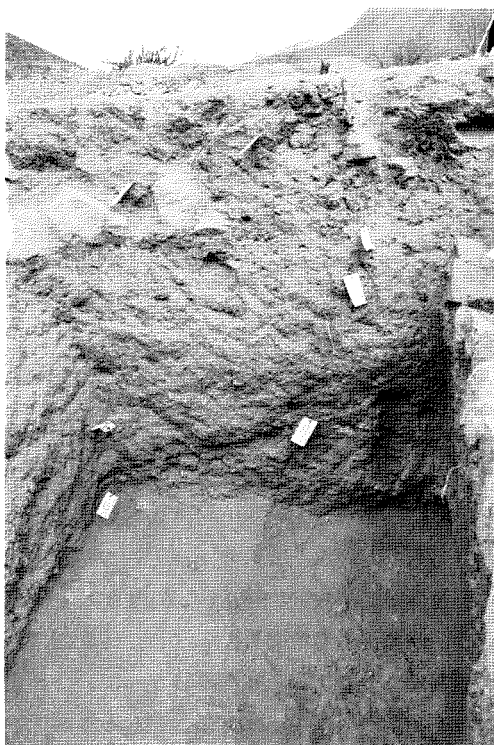


写真11 地山直上の灰層

3-3. D区の発掘（写真12）

D区は「タンボ」と称される部屋状構造物が地表面観察で複数視認できる区画である。先述のとおり、これらの部屋状構造物は、建築軸や石積み技法、あるいは以前に発掘された建造物とのレベルの比較などから、インガタンボ遺跡における最終時期であるタンボ期に属するものであると考えられている。しかしながら、現在までの調査において、これらの建造物は未発掘であるため、部屋状構造物の形態、および編年上の位置づけを明らかにする目的で発掘を実施した。また、部屋状構造物の下部の堆積状況を把握することを通じて、形成期の建造物を確認することも発掘目的の一つであった。なお、発掘区として設定したのは、東西12m×南北8mの範囲である。

発掘では、最初に表土、および崩落している壁材の除去を行った。この区画では想定以上に表土

の堆積が厚く、1m 程度の深さがある地点も存在したため、表土を除去しただけで部屋状構造物の形態が明瞭となった。そして、この時点で、保存状態の良い南側の石壁の高さが 1m を超えたことに加えて、壁がせり出して崩落の危険性がある箇所が存在したため、表土以下の層を掘り下げる範囲を、とくに保存状態の良い西側半分とした。

部屋状構造物内部の発掘では、明確な床面を検出していない。しかし、表土直下の面とその面から約 60-70cm 掘り下げた壁底に対応する面が、比較的均一に均されていたため、これらの面を床面として想定している。また、上記の 2 つの床面の間の土層は、南側部分と北側部分で堆積状況が異なり、前者では大型の礫が大量に混入されているのに対し、後者ではそのような状況は認められなかった。さらに、北側では、壁に接して半完形土器が出土した（写真 13）。この土器は、床面を張り直す際に、埋められたものであると考えられる。

その一方、部屋状構造物の外側の壁は、表土直下の面から約 20-30cm 程度しか続いておらず、その下は基礎となる盛土と自然の岩盤であることが明らかとなった。したがって、この部屋状構造物の下に形成期の建造物が存在するとは考え難い。前回の発掘結果から、この区画では、形成期において広場状空間が広がっていたと想定していたが、ペルー北部の他の神殿遺跡で見られるような半地下式広場ではなく、地面が平らに均されただけの開放空間であったと考えられる。このような建築は、インガタンボ遺跡に特有の極めて独自性の強いものであるといえる。

4. おわりに

本稿は、今年実施した発掘調査に関する予備的報告である。本文中で述べた土器や動物骨、あるいは貝製品や石製品については、今後、建築フェイズと対応させながら、タイプ分類、あるいは種同定や産地同定などの詳細な分析を行っていく必要がある。また、タンボとされる建造物の正確な

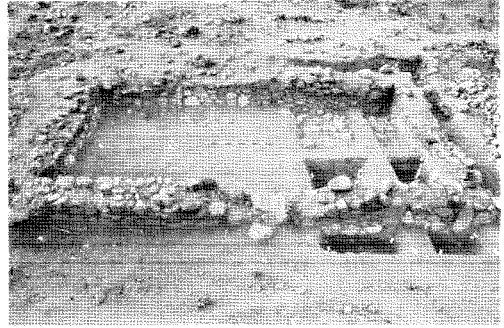


写真 12 D区発掘区遠景

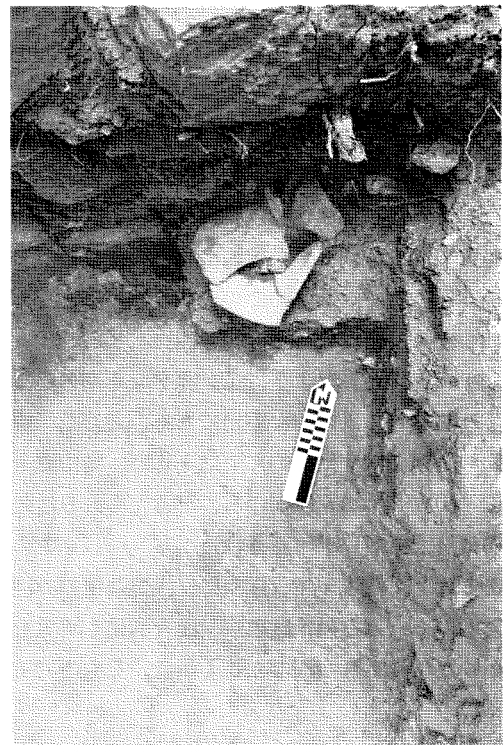


写真 13 D区出土半完形土器

時期決定には、放射性炭素による年代測定が不可欠である。したがって、来年以降は、2006年と2007年の発掘調査で獲得した資料の再分析を含めて、今回の発掘資料の分析に取り組み、議論の精緻化を図っていくつもりである。

【謝辞】

本調査は、「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（科学研究費補助金〈基盤研究（S）〉研究代表者：関雄二）、および「先史アンデス文明における祭祀建造物と社会変化の動態的相互関係」（科学研究費補助金〈特別研究員奨励費〉）によって実施されたものである。調査に関して、様々な便宜を図ってくださり、また、ご助言いただいたアンデス調査団の先生方に、厚く御礼を申し上げたい。

さらに、調査参加メンバーによる、発掘現場からボマワカ市の作業部屋に至るまでの、寝る間を惜しんでの協力には深く敬意を示したい。

最後に、調査開始時より、公私にわたって暖かい支援をしてくれるボマワカ地区の皆に心より感謝の意を表す。

註

（註1）本調査のメンバーは、筆者らに加え、ペルー人考古学者のウンベルト・レビッセ、ペルー・サンマルコス大学の学生であるアナ・タベラ、キラ・ディオス、埼玉大学修士課程の井上恭平の6名である。

（註2）B基壇では、地山を利用した生活面が確認されている。

参考文献

Guffroy, Jean

1989 Un centro ceremonial formativo en el Alto Piura. *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 18 (2): 161-207.

1992 Las tradiciones culturales formativas en el Alto Piura. In *Estudios de Arqueología Peruana*, edited by Duccio Bonavia, pp. 99-122, Fomciencias.

Instituto Nacional de Cultura (INC)

2006 *Programa Qhapaq Ñan. Informe por cuencas hidrográficas del registro de tramos y sitios. Campañas 2003-2004*. Fondo editorial del INC, Lima.

Kaulicke, Peter

1975 *Pandanche: Un caso del formativo en los Andes de Cajamarca*. Seminario de Historia Rural Andina, Lima.

1998 El periodo formativo de Piura. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 19-36.

Malaver, Manuel

2001 *Arquitectura Monumental Formativa del Sitio Inगतambo, Valle del Río Huancabamba, Provincia de Jaén*. Proyecto de Investigación para Optar el Título de Licenciado en Arqueología, Universidad

Nacional de Trujillo.

Miasta, Jaime

- 1979 *El Alto Amazonas. Arqueología de Jaén y San Ignacio. Perú.* Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Dirección de Proyección Social, Seminario de Historia Rural Andina.

Morales, Daniel

- 1980 *El Dios Felino en Pacopampa.* Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Dirección de Proyección Social, Seminario de Historia Rural Andina.
- 1998 Investigaciones arqueológicas en Pacopampa, departamento de Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 113-126.

Olivera, Quirino

- 1998 Evidencias arqueológicas del período formativo en la cuenca baja del río Utcubamba y Chinchipe. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 105-112.

Ravines, Rogger

- 1983 *Inventario de Monumentos Arqueológicas del Perú. Zona Norte (Primera Aproximación).* Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Rosas, Hermilio y Ruth, Shady

- 1970 *Pacopampa: Un centro formativo en la sierra. Nor-Peruana.* Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Seminario de Historia Rural Andina.

Seki, Yuji, Juan Pablo, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordóñez, Walter Tosso, Aracely Espinoza, Kinya Inokuchi, y Daniel Morales

- 2010 Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, en la sierra norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 69-96.

Shady Solis, Ruth

- 1974 Investigaciones arqueológicas en la cuenca del Utcubamba, Amazonas. *Artículo Reproducido de Las Actas del XLI Congreso Internacional de Americanistas* 3: 579-589.
- 1992 Sociedades del nororiente peruano durante el formativo. *Pachacamac* 1 (1): 21-48.

Shady, Ruth y Hermilio, Rosas

- 1979 El complejo Bagua y el sistema de establecimientos durante el formativo en la sierra norte del Perú. *Ñawpa Pacha* 17: 109-154.
- 1987 Tradición y cambio en las sociedades formativas de Bagua, Amazonas, Perú. *Revista Andina* 2: 457-487.

山本 睦

- 2007 「ペルー北部、インガタンボ遺跡第一次発掘調査」『古代アメリカ』第10号: 51-66。

Yamamoto, Atsushi

- 2007 El reconocimiento del valle de Huancabamba, Jaén, Cajamarca, Perú. *Arkeos* 2 (2): 1-16.
- 2010 Inगतambo: Un sitio estratégico de contacto interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.